

「たゆまぬ」

—2 稿—

2023/12/6

雨森 れに

〈人物表〉

武田 佑二 たけだ ゆうじ (35) 和ろうそくの絵付け職人。圭蔵の養子。

武田 圭蔵 たけだ けいぞう (71) 佑二の養父。事故の後遺症で片足が悪い。

吉沢 香織 よしざわ かおり (68) 圭蔵の妹。

武田 みき (享年66)

武田 祐一 (享年35)

〈ログライン〉

和ろうそくの絵付け職人である佑二が、難癖付けてくる養父の圭蔵への殺意を
夾竹桃を用いて実行する。

〈ねらい〉

たゆまぬに込めた意味を考えてもらいたい。

たゆまぬ⇨弛まぬ。ぴんと張り詰めた状態。

たゆまぬに続けたい言葉……努力、殺意、親愛。

1. 武田宅・庭（昼）

夾竹桃の花が揺れている。
作務衣を着た武田佑二（35）が縁側でろうそくの
絵付けをしている。

2. 同・作業部屋（昼）

和室。敷き布の上に絵付けの道具が並ぶ。
佑二はマスク、薄手のビニール手袋、割烹着（以降、
この装備は作業着とする。指定ない場合は作務衣）
で乳鉢を使う。

武田圭蔵（71）が乱暴に襖を開ける。

圭蔵 「おい。ろうそくなんか作るんじゃない」

佑二 「これは仕事だって言ってるんだろ」

圭蔵 「全然金にならないことだろうが。ちつとも恩を返そうと
もしない。せっかく養子に貰ってやったのによ。こんな
もの作りやがって」

圭蔵、杖で乳鉢を払う。乳鉢が転がり、中身の粉末
が散る。

佑二、慌てて口元をマスク越しに強く抑えて、

佑二 「やっていいことと悪いことの区別もつかねーのかよ」

圭蔵 「おーおー、職人ヅラだけはいっちょまえたわ。お前がみ
きと祐一の代わりに死んでくれたらよかったのになあ！」

佑二、圭蔵を突き飛ばして走り去る。

圭蔵は廊下で尻もちをつく。

立とうとするが、なかなか起き上がれない。

3. 同・洗面所（昼）

神経質そうに、うがいをし、顔を洗う佑二。

鏡に様子を伺う圭蔵が映る。

佑二が顔をあげ、鏡越しに2人が睨みあう。

4. 同・作業部屋（夜）

作業着の佑二。

白いろろうそくにピンクの夾竹桃の花の絵を描く。

畳に布が敷いてあり、そこに夾竹桃の絵が描かれたろうそくが並ぶ。

5. 同・仏間(夜)

小さい仏壇の前にベッドがあり、圭蔵が腰かけている。

仏壇には夾竹桃のろうそく。燃え尽きそうになっている。

圭蔵は**絵柄を見て嫌そうな顔**。

新しい夾竹桃のろうそくを取り出し、灯す。

圭蔵、**ろうそくの煙を吸い、大きく咳こむ**。

6. 同・庭(朝)

庭木の剪定をする圭蔵。

枝を集め、焚火の準備をする。

佑二の絵付けの道具と**仏壇にあった夾竹桃のろうそく**が枝の中に混ざっている。

圭蔵は咳こみながらも火をつける。

× × ×

すべて燃え尽きた焚火跡。

その横で圭蔵が倒れている。

佑二、**家の中からその様子を確認する**。

7. 同・仏間(朝)

作業着の佑二が窓を開ける。

仏壇に市販のろうそくを置く。

ベッドのシーツ類をはがし、拭き掃除を始める。

8. 同・作業部屋(昼)

佑二、**作業衣に着替える**。

作業着はビニール袋に入れ、**押入れの天袋へ押し込む**。

9. 同・庭(昼)

佑二、死んでいる圭蔵の横で電話をする。

佑二 「(焦った声色で)すみません、あの、父が庭で倒れていて——はい、呼吸が止まって冷たく……」

10. 同・仏間(朝)

ベッドに圭蔵の遺体。

喪服姿の吉沢香織(68)が線香をあげる。

隣には喪服姿の佑二。

香織 「検死、早めに終わってよかったねえ。顔も綺麗にしてもらって……」

佑二 「母と兄の時と比べたら、そうですね」

佑二、困ったように笑う。

香織もつられてはにかむ。

圭蔵を一瞥し、ため息をついて、

香織 「夾竹桃に毒があるって、今じゃ有名な話なのにねえ」

佑二 「自分も知ってるものとはかり思っていました」

香織 「そうだよねえ。なんでこのバカは燃やしちゃったんだろ

うねえ」

香織、ハンカチで目を押さえる。

佑二 「ほんとに。自分ももっと早く気付いていれば……」

佑二、目頭を指で押さえる。

香織、泣きながら佑二の背中をさする。

香織 「もう、あの木は切っちゃいましょうね」

香織、庭の夾竹桃を見る。

11. 同・外観(夜)

玄関で弔問客を見送る佑二。

12. 同・仏間(夜)

香織が死に水を含ませている。

香織 「たった5人しか来てくれないなんてね」

佑二 「足を悪くしてから、さらに引きこもるようになってましたから」

香織 「もともと人に好かれる性格じゃないからだと思うけどね。ふたりになってから佑二ちゃんも苦勞したでしょ」

香織、仏壇のろうそくを指差す。

香織 「あれも兄さんに遠慮して普通のにしたんでしょ。佑二ちゃんのつけてよ」

佑二、驚いたように首を振る。

佑二 「オヤジが知ったら怒って飛び起きますよ」

香織 「起きれるもんなら起きればいいじゃない。不注意で勝手に死んで。情けないったら」

佑二 「そんなこと……」

香織 「みきさんも生きてれば同じこと言ったと思うよ」

佑二 「そうですね、母さんはずっと僕の味方だったな。自分が死ぬ時も仏壇には僕が作ったやつでって……」

香織 「（驚いて）今は一本も置いてないじゃない。兄さんは、みきさんの言うことも聞いてなかったってこと」

香織、仏壇のろうそくを見る。

佑二、頷く。

香織 「佑二ちゃん。自分のろうそく持つてきなさい。私が許すから」

× × ×

佑二、部屋に戻ってくる。

手には大きな木箱。中に絵付け済みのろうそくが入っている。

香織 「きれい。みきさんから聞いてたけど、こりやすごいわ」

佑二 「母さんはピンクの花がお気に入りでしたね」

香織 「ピンクっていうと……桜、牡丹、梅、これはカーネーション？」

佑二 「母の日が来るとつい。洋風すぎますかね」

香織 「いいじゃない。今日はカーネーションにしましょ。兄さんはあの世でみきさんに怒られればいいの」

香織、仏壇のろうそくを佑二のものと交換する。

佑二、香織の背後で圭蔵の遺体を見て、にやりと笑う。

佑二、押入れの奥から箱を出す。

蓋をあけると使い込んだある絵付けの道具。その上に手紙。

手紙の中身を読む。

目を閉じ、空を仰ぐ。

それから敷き布を広げ、道具を並べていく。香織が部屋に入ってくる。

香織 「お道具無事だったの」

佑二 「あ、ああ。予備ですよ。よく使ってたのは、警察の方が言ってた通り、燃やされてました」

香織 「よかった。焚火の跡から道具が出てきたって聞いた時は頭に血が上るかと思ったの」

佑二 「それより、香織おばさんに話さなきゃなことあって」

香織 「はいはい。財産分与ならユウちゃんの好きにしていいけど……」

佑二 「いやいや。違います。自分、老舗ろうそく会社の園村堂で専属職人として採用されることになったんです」

香織、目を見開く。

香織 「それってすごいことじゃない！」

佑二 「時間はかかりましたけどね。何度も試験受けて、ようやくです」

香織 「みきさん、天国で大喜びだわ」

佑二 「きつとあっちで合流したオヤジと喧嘩しますね」

佑二、困ったようにはにかむ。

香織 「兄さんは反対してたものね。こんなに努力してるってのに」

佑二 「生前、母が褒めてくれたから、頑張れたんです。アロマキャンドルまで作れるようになりましたよ。香料を練りこんで作るんですよ」

佑二、道具の入っていた箱からアロマオイルをいくつか取り出す。

香織 「はあー、こういうたゆまぬ努力が結果に結びつくもんですよ。今度私にもアロマキャンドル作ってよ」

佑二 「……あまり頻繁に嗅ぐと体力削られちゃうと思うんで。

香織おばさんには絵付きろうそくを沢山送りますよ」

香織、嬉しそうに微笑み、それから無表情になって顔を伏せる。

香織 「私、謝らなきゃ。佑二ちゃんが兄さんの恨みというか、八つ当たりで酷いこと言われてたの知ってたのに、知らないフリしてたの」

佑二 「その判断は正しいですよ。オヤジは誰にでも手をあげる人間でしたし」

香織 「それでも、甥を犠牲にしていってことではないでしょ」

佑二 「でも、もう、死にましたから」

香織、顔をあげる。

佑二と香織、無言。

香織 「そう、ね。……そろそろお坊さん迎えに行きましょう」

佑二、香織、部屋を出ていく。

押入れの天袋の中。ビニールに包まれた枝と作業着。

14. 同・廊下(朝)

香織の後ろを歩く佑二。

佑二、満面の笑み。

おわり